《研究ノート》

エドワード・ハーバート『自叙伝』(翻訳)
―― (5)「ヨーロッパにおける職業軍人の経歴とフランス大使就任」――

山根正弘　訳

［訳者による前口上］十七世紀イギリスの外交官にして詩人および哲学者・歴史家，さらにはリュート音楽にも精通したエドワード・ハーバート（チャーベリーのハーバート卿）による半生の続き。

一六一四年，三十一歳のとき，八十年戦争の休戦中にもかかわらず，スペインと低地帯［ネーデルラント］との間で一触即発の兆候を感じ取ると，オレンジ公に仕えるため大陸に出向く。そこで数々の手柄を立て，武勇伝がヨーロッパ各地に伝わる中，築城に一家言を持つに至る。一六一五年，三十二歳のとき，巷説の評判を聞きつけたサヴォイア大公の目に留まり，仕官することになる。折しもサヴォイア大公は，領土継承問題からスペインに怨恨を抱きプロテスタントに改宗し，対スペイン戦争の準備を着々と進めていた。大公はユグノーとの盟約に基づき，フランスはラングドックからピエモンテまで，ユグノー四千名の援軍（傭兵）を率いる司令官を探していた。だが，フランス国内で母后マリー・ド・メディシスにより発出された徴募禁止令に抵触する恐れから，彼はリヨンで拘束されると，この華々しい職業軍人としての経歴も頓挫する。このあと，尻すぼみとなった軍歴から一転，大陸から本国イギリスに戻ると，温帯性のマラリアとおぼしき病（瘧）に倒れ，療養する。その宿啊というべき瘧の平癒のあと，人生の転機が訪れる。一六一九年，三十六歳のとき，国王ジェイムズ一世の寵臣バッキンガム侯爵（後の公爵）の推挙で，フランス大使に抜擢される。一六一〇年に暗殺された仏王アンリ四世のあと，幼くして王位に即いたルイ十三世に対すハーバート卿の評価は，両国間の友誼を損なうのではないか思わせるほど手厳しい。

訳文中，諸々の括弧の使い方は，従前どおり。

なお，訳者が施した注の番号についても，前号より続く連番である。

スピノラ侯爵に暇乞いをする際，もし将軍殿が［新教徒ではなく］異教徒討伐の軍を率いるのであれば，小生はその戦(いくさ)で先陣を切り，命を賭す所存と名乗りを上げ，それとともにスペイン軍視察の許可を求めた。許しが出て侯爵に別れの挨拶を済ませ，心ゆくまで視察した。築城について低地帯軍との相違を仔細に見聞し，オレンジ公［オラニエ公マウリッツ］のもとに帰り旅の成功譚を語った。この頃，サー・ヘンリー・ウォットンが英国王の命を受け和平の調停に乗り出した(40)。ウォットンはその目的でヴェーゼルに到着し，私の案内でスピノラ軍を訪問した。一晩過ごした後，激しい雨の中，森を抜けてカイザースヴェルト［カイザースヴェーアト；デュッセルドル

フ近郊］に到着したが，そのことが我が軍の驚異の的となった。皆が口を揃えて言うには，この険路を辿る者で追い剥ぎに遇うか，命を奪われるか，その憂き目に遭わない者は皆無だという。そこからケルンに行き，名所旧跡を見学したが，見所のひとつはセント・ハーバート修道院［ドイツ修道院；大司教聖ヘリベルトに因む］である。次のハイデルブルクでは，プファルツ選帝侯とその侯妃［ジェイムズ一世の娘エリザベス］に謁見する栄に浴し，大いに歓待された。ウルムそれからアウクスブルクに赴き，そこではこの上ない栄誉に浴した。ブリュッセルの大使が宿泊する旅籠に着くと，町の人々はワインを大瓶で二十本運ばせた。そのうち十一本を大使に，残りの九本を私に授けた。それとともに，数々の武勇伝の方が先に伝わりましてね，とお世辞も添えられた。ここからスイスを経てトレント，そしてヴェネツィアに渡った。英国大使サー・ダッドリー・カールトンに敬意を以て迎えられた[41]。なかでも，閣下に連れられムラノ島の尼僧に会うことができた。尼僧は容姿端麗，しかも美声の持ち主である。ヴェネツィアだけではなく当代随一の希有な存在であると思われた。我らが回廊に面する僧房に行くと，尼僧は鉄格子で隔てられた向こう側から姿を現し，歌声を披露した。尼僧が引き退く際，銀鈴が振れる声音に酔いしれ，大使もその令夫人も感謝・感激の思いを表す言葉が見当たらなかった。このまま無言で尼僧を帰しては，美貌と美声の調和に礼を欠くと思い，イタリア語で感謝の意を表した。いつ命数が尽きようとも，尊顔も歌声も変成せずともそのまま天使とならんと。この言葉は預言となった。ローマに行き当地に戻ると，尼僧の訃報が届いていた。

何日かヴェネツィアに逗留したあと，フィレンツェに行った。その地で，オクスフォード伯［第十八代；ヘンリー・ド・ヴィア］とサー・ベンジャミン・ラディヤードに会った。花の都で珍しいもの，特にメディチ家の稀代の礼拝堂を見物した。内側がすべて粒の粗い貴石で飾られ，それに飾り鋲はといえば，その頭の片方が鉄，もう片方が金になっており，嵌め込まれている場所の色彩に符合し荘厳さを加えていた。次にシエナ，そしてクリスマスの祭日より少し前にローマに着いた。宿屋で馬から降りるとすぐ，イングリッシュ・コレッジ［イングランド系神学校］を目指した[42]。校長に取り次ぎを頼むと，ほどなく戸口に，見たところ厳格そうな人物が現れた。お聞きの言葉から，郷里（くに）を告げる必要はないでしょう。当地に参りましたのは，論争の術を学ぶためではなく，古代の遺物を見学するためでございます。生まれ育った国の宗教に不敬でなければ，しばらくの間ご厄介になりたく存じます。もし叶わぬならば，鞍はまだ温かく，この町から立ち去りますと。校長［トマス・オーウェン，ウェールズ出身］が答えて言うには，あなた様以外で，これまで当地の宗教ではなく他の宗教を奉じていると告白なされた方は，未だございません。お見かけしたところ，お手前は人品卑しからぬ御仁であり，私としてはご自由に過ごして頂きたいと思います。しかし，某（それがし）の経験が教えるところによりますと，ローマ・カトリックを侮辱しない人は侮

辱されることはないのですが，他の者たちはあなたの滞在中，身の安全を保障しないでしょうと。そのあと誰何され，エドワード・ハーバートの名で通っておりますと。文武両道に秀でるお方と，おうわさはかねがね承っておりますと。すぐさま食事に誘われた。お誘いの言葉を愛の証として頂戴いたしますが，お断りの釈明をさせて頂きます。宗教間の争いを好む人物と思われるといけませんが，イギリスにいた頃と変わらず，当地に来ることだけでも信教の自由で許容される限度だと思っております。ですが，旧教と新教で意見が一致している見解は，一致していない見解で両者を分け隔てる以上に，太い紐帯で両者を固く結び付けています。小生と致しましては，敬虔な信仰生活を送る人を愛します。新教であれ旧教であれ，誤謬は憎悪よりも憐憫の対象です。このように信条を吐露して，丁重に暇乞いをした。約一ヵ月の間，当地で遺物を見学して，民衆とその心を支配する偉大な帝国を築き上げた真髄が何であったか解ったような気がする。つまり，この世を治める上で，信仰箇条と罪の赦しこそが，かつて政治家によって講じられたあらゆる術策｛定められた法令すべて｝よりも枢要な「帝政の秘訣」［権力の極意］であると。

ローマを思う存分に視察したあと，ティボリ（昔はティブルと呼ばれていた）に行き，立派な宮殿と庭園を見た。フラスカティ（昔はツスクルムと呼ばれていた）にも行った。その後ローマに戻り，枢機卿会議で教皇［パウルス五世］のご尊顔を拝した。会議が終わると，教皇が祝福を授け始めたので，即刻中座した。私の行動を不審に思った人物が，逮捕しようと警備を遣した。脇道に逸れて，難を逃れた。宿屋に戻り駒を進めて半時，神学校の校長が駆けつけ忠告した。異端審問所に告発され，ここにいては身の安全が保てませんと。この警告に心から謝意を表した。けれど，当面は宿を変えただけで，一日か二日して馬に乗り，ローマを出てシエナに向かい，フィレンツェに舞い戻った。神聖ローマ皇帝［フェルディナント二世］より，ノーサンバランド公あるいは伯の爵位を授けられたサー・ロバート・ダッドリー［同名のレスター伯の庶子］とサデル［エリザベス・サウスウェル］夫人に会った。その美貌のご婦人は，ダッドリーがイギリスから連れ出し当地で妻にしたのだった。町を出る前夜，宴席に招待された。ふたりに別れを告げ，翌朝旅の支度を済ませ，いよいよ出かける段になって，使者より言伝を賜った。サー・ロバート・ダッドリーと同じ手当，つまり年俸として二千ダカット［英貨で約五百ポンド］を受ける気はないかと。トルコとの戦争で公爵［トスカーナ大公コジモ二世］にご奉公しないかとの打診だった。このかたじけない申し出は，ダッドリーとサデル夫人それに旧友ロティ殿のうち，だれの斡旋によるか定かではないものの，身に余る光栄だと謝意を表したが，丁重にお断りした。低地帯戦争で閣下［オレンジ公］に仕える想いを胸に抱いていたから。

しばらく滞在したあと，パドヴァに向かう途中，フェラーラとボローニャに立ち寄った。パドヴァ大学で学識のある教授連，特に［チェザーレ・］クレモニーニの講義

を拝聴して時を過ごした。低地帯からずっと跨っていたイギリスの馬とスコットランド製の鞍を諦め，舟でヴェネツィアに向かった。大使閣下のサー・ダッドリー・カールトンは，この時までにサヴォイア公［カルロス・エマヌエーレ一世］の宮廷にしばらく滞在するよう命を受けていた。その要請を私に告げて，一緒に来ないかと尋ねた。この申し出をありがたく受けた。サヴォイアの宮廷を見たかったし，低地帯に行く途中でもあった。その地で，来夏，［対スペイン］戦争を視察するつもりだ。

こうして大使閣下と馬車でミラノに行くと，大使は総督の館に招かれ，滞在中に歓待を受けることしばしばであった。ミラノでは，音に聞こえた尼僧がオルガン演奏に合わせて歌うのを聴いた。そのやり方は，もうひとりの尼僧が先に歌い始め，続いて彼女が自分の声部を披露するというものである。その優れた技法と美声ゆえに拍手喝采を浴びた。ただ，普通の女性よりも音程が低いように感じられた。その批評を受けてか，その場を立ち去ろうとしたとき，突然どこからともなく，あの評判の歌姫がもうひとりの尼僧より，音階を一オクターブ上げて歌う声が聞こえた。天来の妙（たえ）なる調べたるや，これまで聴いた中で，最高に閑雅で力強くそれでいて声さやかにして，恍惚の境地に陥るほどであった。

記憶によると，ミラノからノバーラに赴いた。当地でスペインの総督に歓待された。これまで経験した中で最大級の豪華絢爛さであった。しかし，三種類の料理が，それぞれ三皿，合計で九皿しか用意されていなかった。最初の料理は，厳選された肉を煮込んだシチューで，銀の大皿で三皿，それも大きな食卓ほどの長さの皿に盛られる。煮込まれた極上の肉は積み上げられ，頂上に雀が載せられる。見た目は，人工のピラミッドのようである。二番目の料理は，一皿目と同様に炙り肉で，あらゆる種類の鳥獣，雉や鷓鴣（しゃこ），それより小さな類に至るまですべての鳥肉が積み上げられ，頂点に雲雀が載せられる。三番目は，あらゆる種類の乾燥果実（ドライ・フルーツ）で，同様に積み上げられ，天辺に丸い金平糖（コンフィット）が置かれる。

ここからスペイン領との国境の町，サヴォイア公国のヴェルチェッリに赴いた。サヴォイア公国はスペインと戦争状態にあった。その町から名もなき所を通り過ぎ，公国の宮廷があるトリノに着いた。二, 三日そこで休暇を過ごしたあと，低地帯に行くため大使閣下に暇乞いをした。途中，モン・スニー峠の麓に差し掛かったとき，サヴォイア大公から親書を携えてスカルナフィッシ伯爵［アントニオ・ポンテ］がやって来た(43)。親書の趣旨はこうだ。大公殿下は，騎士の鑑であると小生の評判を聞きつけ，その戦いぶりを思い描いたご様子で，奉公する気があれば，小生自身で条件を定めてよい，というものであった。身に余るお誘いであり，踵を返した。旅籠は大公のお膝元にあり，部屋は絹糸や金糸の綴れ織りで飾りが施され，とても大きな寝台が置かれていた。英国大使の官邸に逗留した際に要した費用も大公の負担で支弁して頂いた。殿下より直直に任官の要請は本当だと裏書して頂いただけではなく，様々にお世

辞を賜った。私も殿下にお礼の言葉を返した。ご奉公の趣が解りますれば，殿下より賜るご用命を必ず果たしますと。

［一六一五年二月半ば］ちょうど謝肉祭の時季であった。サヴォイア大公は，名君の例にもれず，見目麗しい淑女と舞踏が好みで，舞踏会や仮面舞踏会を頻繁に催させた。大公のご令嬢も，他の貴婦人方とご一緒に舞踏を披露された。大公は自ら手招きして美しい淑女の傍に常に私を呼び寄せ，巧みな話術でふたりを楽しませるのを常套手段とし，それがまた他人をもてなす際のイタリア式の極意であった。他にも多くのことを為された。事細かに説明されることはなかったが，私を重用すると公言された。［対スペイン］戦争を始める時機はまだ来ていないとか，春の戦闘に備え軍を鍛えているだけだとか，仰せられた。

大公は，ついに私の処遇を決められた。フランスのラングドック地方に赴き，対スペイン戦争が勃発した際，救援に馳せ参じると盟約を交わしてあった新教徒［ユグノー］四千名をピエモンテまで送り届ける役目を仰せつかった。謹んでオファーを受けた。大公に暇乞いを済ませ，当地で受けた真心の歓待に対して，七十から八十ポンドを士官たちに分け与えた。ヴェネツィア駐在英国大使［ダッドリー・カールトン］と同様にその地で任に当たっていたサー・アルベルトゥス・モートン［大使補佐］に別れを告げ，支度を整え長旅に出た[44]。スコットランドのサンディランズ一族の老騎士がこの噂を聞きつけ，ハイデルベルク［プファルツ選帝侯の居城がある］まで私の持ち馬を拝借できぬかと願い出た[45]。次の条件で貸与した。道すがら馬たちを大切に扱い，現地に着いてからも手厚く世話をするようにと。

スカルナフィッシ伯爵が遠出に付き添うよう命じられた。伯爵は宝石を携え，フランスのリヨンに着くと質に入れ，得たお金で前述の兵士の支払を済ませる［傭兵を募る］ように命じられていた。大公は人民に税を厳しく課していた。馬や牛それに羊に一定額の税を取り立てるばかりではなく，後には煙突にまで課税した。最後には人頭税として，ピストル金貨一枚（十四シリング）を徴収した。それでもなお，軍資金を必要とした。臣民たちの重税に対する忍耐を不審に思い，無辜（むこ）の民に尋ねた。よく酷税に耐えられますねと。すると返ってきた答えは，租税のことで殿様を悪し様に言う気にはなりません。むしろ殿様より賜る恩恵に感謝していますという。

スカルナフィッシ伯爵と私は長旅に出かけた。日中は飲み食いをせず先を急いだ。夜はゆっくり宿に泊まろうと，伯が提案した。山の頂にある寂れた宿屋に着くと，黄昏時になっていた。女将が馬の嘶きに気付き，左腕に生まれたばかりの乳呑児を抱き，手に燈心草の蝋燭を持ち現れた。女将はすぐにスカルナフィッシ伯爵だと判り，言い訳をした。旦那様，間の悪いときにお越しになられました。殿様の軍兵たちが昼間に現れ，すべてかっさらって行きましたと。悲しい面もちで伯を見ると，伯はそばに寄って耳打ちした。女将は我々が兵士たちと同じように手荒な真似をするのではな

いかと思っているらしい。建物の周りをぶらついている間に，中に入って何かないか見てくれ。鴨や鶏が見つかるかもしらん。このような次第で建物に入ると，他に家具があるにもかかわらず古びた腰掛けの端に女将が座っていた。燈心草の蝋燭を持って私の所にやって来ていうには，神にかけて誓いますが，先ほど伯爵様に申し上げたことに嘘偽りはございません。本当に，食べ物は何もありません。ご身分のあるあなた様に，ひもじい想いをさせるのもお気の毒でございます。よろしければこれをお召し上がり下さいと，搾った母乳が入った木椀を差し出した。この思いがけない親切にいたく心打たれた。これまでこれほど心に染みる優しさはかつてなかった。腕に抱いた赤子から乳を奪うことはできません。しかしながら，このことは生涯で最大の慈悲深き行為として忘れません。そう言ってピストル金貨を一枚恵んだ。伯爵と私は再び馬に跨り，さらに先を急ぎ旅籠に着いた。粗食だったが，空腹のため美味かった。

記憶によると，この旅で夜にガブル山［ガリビエ峠］を越えた。断崖を輿（こし）に載せてもらい降りた。道案内が藁の束を手に先頭に立ち，時折火を点け行く手を照らした。麓で馬に乗り，一休みしようとブルゴワンの宿場に向かった。というより，実を言うと，様々な人々，なかでもサー・ジョン・フィネット［式部官］とサー・ロバート・ニューポート［母方の従兄］から，そこの宿屋に娘がいて，彼女が生涯で忘れられない絶世の美女であるとの噂を聞いていたからである。宿に着くと，スカルナフィッシ伯爵が私に二, 三時間休んでくれと言った。先にリヨンに行き，ラングドックでの任務遂行のため軍資金を調達するつもりらしい。宿屋に娘御が見当たらず，女将と亭主にイギリスで聞いた数々の噂話を明かし，別嬪の誉れ高いご息女，ぜひお顔だけでも拝見したいと申し出た。娘は嫁ぎ先にいて，すぐに呼び寄せるという。また，お見かけしたところお疲れのようですから，それまで寝台でお休みになっては如何でしょうと。二時間ほどして目を開けると，件の小町が枕元に座っていた。私が目を覚ましたとき，付き添うためであったらしい。彼女の容姿を少し描いてみよう。輝くばかり艶のある黒髪で，天然の巻き毛である。それもお洒落な婦人が髪を調えるような感じにカールしてある。しかも頭頂に登るにつれて段をなしており，その一つひとつが（バースの騎士が身に纏うガウンの）深紅色のリボンで結わえられている[46]。このように髪が肩の先から頭頂に至るまで束ねられ，優雅に紡ぎ合わされた印象を受ける。目はと言えば，彼女の美全体と頭髪の雛型であるかの如く，黒くつぶらな瞳。それも，眼から光や炎が，髪を束ねる深紅のリボンに似て，妖しく耀く。これまであれほどのかわいらしい口元や白い歯を見たことがない。簡潔にまとめると，口や鼻などすべて造作が互いに調和が取れ，不釣り合いなものは何もなかった。ただ，肌の色が浅黒いという点を除いて。それでも，両頬は血の巡りがよく，肌の色より赤みがさす。身に纏っていたガウンはトルコ製の粗布織りで緑色であった。肩や袖それに足に至るまで切込み，つまりスリットが入っており，手の幅ぐらいの間隔で髪と同じリボンで結ばれ

ている。彼女が身に着けていた衣裳も，顔立ち同様に人目を引く。宿屋の娘を描くのに長々と時間を割いたのは，これまで会った中で同時代の如何なる麗人にまさり，他の美女を語るより値打ちがあると思ったからだ。結局，一時ほど旅寝したあと，不調法なことは何ひとつ行なわず出発した。疲労困憊の極みだったが，癒しの天女を拝み，かなり元気を取り戻した。

そこから一路リヨンへ向かった。市壁の門を潜ると，通常の手順に従い番兵から，どこのだれで，どこから来て，どこへ行くのかと尋ねられた。答えている間に，番兵のひとりが私の顔をしげしげと眺め，手にした紙と照らし合わせるのが判った。何度も繰り返すので，何かよくない前兆かと訝った。その邪推が的中した。フランスの母后［マリー・ド・メディシス；幼きルイ十三世の摂政］により，本国で兵を徴募してはならぬと勅命が出たばかりであった。トリノ駐在のフランス大使ランブイエ侯爵［シャルル・ダンジェンヌ；侯爵夫人のサロンが有名］が当時のリヨン地方総督サン＝シャモン侯爵［アルマン＝ジャン・ミッテ］に手配書とともに人相書を送っていた。勅命はとても厳しく，兵を募る者は斬首に処すという。この不運な出来事の行く末を案じながらも，ただひとつ頼みの綱は，まだ兵を実際に募っていなかったことである。しかしながら，番兵に地方総督のもとに出頭するようにと促された。番兵に連れられ教会に行くと，ある人物が夕べの祈りを捧げていた。教会の出入り口付近を歩いている間，ふと頭に浮かんだ想いは，もし軍兵を徴募していたら如何なる危険に身を晒すことになったのか，であった。しばらく歩くと，ほどなく黒服に身を包んだ人物が付き人もなくたったひとりで近づいてきた。この時はこの人物が地方総督であるとはつゆ知らず，礼儀作法を無視して挨拶した。最初の問いはどこから来た，であった。トリノと答えた。次の問はどこへ行くつもりか，であった。まだ決めていないと答えた。三番目の問いはトリノで何か変わったことは，であった。新しい情報は何もないと答えた。というのも，彼をせっかちか詮索好きな人物ぐらいにしか思えなかったからだ。地方総督は私を連れてきた番兵のひとりを呼び，彼に耳打ちしたあと，私に同行を命じた。この番兵が地方総督のところに案内してくれるものと思い込んでいたので，率先して後に付いて行った。番兵は黙したまま教会から連れだし，立派な建物に案内した。一歩足を踏み入れると，教会で面会した人物，つまり地方総督の命によりここに拘束すると告げられた。あの方が地方総督などと知る由もなかったし，ここが牢屋だとも思えない。さらには，再びここを出られたとして，地方総督も町全体も私を生きたままここに連れ戻すことはなかろうと思う，と返答した。館の主人が優しく話しかけてくれた。如何なる旅籠にもまさる，この館で最上の部屋に案内しましょうとの申し出を受け，川のせせらぎが心地よい豪華な部屋に上がった。半時もしない内に，人がやって来た。サー・エドワード・サックヴィル（現ドーセット伯爵）がイギリス人の身柄拘束を聞きつけ，拘束されたのはだれで理由は何かなど，情報収集

のため使者を派遣したのだった[47]。地方総督は，拘束した理由について，私の短い返答か，それとも母后の勅命に背き徴兵する任務か決めかねており，その両方に少し触れただけで，使者に満足のいく回答を与えず帰した。

これを受けて，サー・エドワード・サックヴィルは私が留置されている館に乗り込んで来た。私を見て抱擁するとすぐ，ここで何をしていると訊いたので，会えて嬉しいが，何で身柄を拘束されたかその理由が解らないと答えた。サヴォイア大公のためにすでに兵を徴募したかと問われたので，一兵卒たりともと答えた。それでは請け合ってもよいが，地方総督は君の教会での振る舞いと短い返答に腹を立てられたのであろう。（番兵をひとりも連れず，みすぼらしい衣服に身を包んでいた人物を地方総督と考えるのは無理だった，と答えた）地方総督にもう一度会って申し開きをすれば，きっとすぐにお解き放ちになるよ。そう言って彼は地方総督のもとに行き，私の氏素性や身分階級，まだ兵を徴募していないこと，さらには地方総督だとは知らなかった旨を告げた。すると地方総督は，自ら出向いて私を解放したいと伝えてほしいと言ったという。

拘束を解く報せはサックヴィルが持ってきた。地方総督から釈放の命が出ただけで十分，と答えた。このようなやり取りが行なわれている間，どなたのご配慮かはっきりと解りかねるが，端整な目鼻立ちの若者が窓の下に楽団を引き連れ，何度もこちらを見上げながら男女入り乱れて踊り始めた。だが，サックヴィルが釈放の通知を携え戻ってきたばかりだったので，ただありがとうと窓から感謝の意を表し，一同の者と総督のもとに馳せ参じた。総督の奥方とお歴々の方々が集う大広間に着くと，総督は帽子を手に持ち，己がだれか判るかと尋ねた。その時，奥方様が私の代わりに答えてくれた。教会にひとりで出向き，この僧衣を身に纏っていて，どうしてあの方に解るものですか。それもその他のことについても，あなたはあのお方にとって，赤の他人に等しいというのに。奥方様のご厚情にその時即座に気が付かなかったが，のちにフランス大使になったとき，改めて深く感謝した次第である。地方総督が次に出した質問は，教会の時と全く同じであった。皆の前で，私も全く同じ答えをした。地方総督と知らなかった時と同様，その様な答え方をすれば首尾一貫性があると考えてもらえると思ったからだ。地方総督はそれでもなお納得せず，見かねた奥方様がまた助け舟を出してくれた。私があのような返答の仕方をした理由（わけ）を並べ立てると，それでようやく総督は口を噤んだ。総督が踵を返したので，同様に背を向けてサックヴィルと宿泊所に戻った。ただ，奥方様に深々とお辞儀をするのは忘れなかった。

その夜は，努めて心穏やかに過ごしたが，翌朝，サー・エドワード・サックヴィルに為すべきことを伝えた。とても酷い侮辱を受けたので，相手が拒めないように丁重な言葉を連ね，決闘状を叩きつける所存だと。すると，諦めるよう説得された。それでこの件では，サックヴィルの助太刀は望めないと解ったが，果たして翌日，彼は町

を出た。

ひとり取り残されて，果たし状の送り方を思案した。結局は以下のように書いた。

謹啓　わけもなくとても不快な思いをさせられましたので，それに一矢報いなければ男として情けなく思う次第です。したがいまして，場所を指定していただき，一戦交えたく果たし状を送ります。腰抜けと思われたくないのであれば，決闘に応じるとともに，是非とも権力をご濫用なさいませぬようにお願い致します。　敬具

二,三日の間，果たし状を渡してくれる人物がこの町には見あたらず，地方総督の座に胡坐(あぐら)をかく者に最大限の意趣返しをする最後の手段として，自ら手渡し，どのように受け取るかを見定めようと意を決した。

その夜，たまたま先述のテラン殿が町にやって来た。私のことをよく覚えており，フランスおよびジュリアーズでの友誼を思い出し，私のために一肌脱ごうと申し出てくれた。これ幸いにすぐさま懐から決闘状を取り出し，ある人物に渡して頂ければとてもありがたい。フランス人といのは，名誉を重んじ慇懃に為された事柄については，拒み疎んじることのない立派な国民であることは承知しており，累(るい)が及ばないように遂行してもらいたいと伝えた。

テラン殿は果たし状を受け取り，目を通して言った。言葉遣いは丁寧で思慮分別が具わっています。けれど，地方総督から期待に添うような返事は来ないと思われます。しかしながら，届けましょうと。このような次第で宿屋に戻った。この三日三晩と較べると，枕を高くして眠れるはずだったが，夜中の一時頃，門戸を乱暴に敲く音で目が覚めた。敲き方があまりに激しく，戸が壊れるのではないかと思われるぐらいだった。扉の隙間から燈火が見え，即座に下着のまま起きあがり，抜き身の剣を手にして扉に駆け寄り誰何(すいか)した。それとともに，私を虜にしに来たのであれば，決死の覚悟で応戦すると言いながら，扉を開けた。見ると，階段に斧槍(ハルバード)で武装した兵が六名はいた。抵抗しようと身構えた途端，隊長が事情を説明した。ここに遣わされましたのは，地方総督ではなくモンモランシー公（先述のモンモランシー元帥のご子息，二代目アンリ）の命でございます。公爵閣下はパリからラングドック（そこの地方総督）に向かう途中，昨夜遅くこの町にご到着されました。もし友情に変わりがなければ，即刻身支度を整え来て頂きたいとのことですと。さらに，この話は紛れもなく真実であるという。事情が飲み込めたので，しばし部屋から下がらせ，服を着て同行した。当地の地方総督の例の広間に案内された。モンモランシー公爵や様々な騎士たちが貴婦人方と踊っていた。早速公爵のもとに行くと，即座に脇に坐らされた。地方総督とのいざこざは聞いた。果たし状を送ったそうだな。とはいえ，地方総督が公務ゆえに為したことは，私人として応じる義務はないと思う。けれど，貴君が望む正当なやり方で十分に恨みを晴らしてもらいたいとも願う。そう言って，私を地方総督のところに連れていくと，地方総督が素直に謝った。あなた様の氏素性が知れました。へそを

曲げて申し訳なく思います。これで意趣返しはなしにして下さいと。モンモランシー公爵は間髪をいれず，それで結構とフランス語で執り成した。閣下に顔を向け，同じような状況であれば，報復を考えましたかと尋ねた。そうだね，と答えられた。このあと地方総督に向き直り，同じ質問をした。あなた様には及びませんが，同じく仕返しをしたであろうと答えた。赦しの接吻を地方総督に与えると，抱擁で返したので，一件落着した。

モンモランシー公爵はご尊父の元帥閣下と私との親密な間柄を覚えていて下さり，亡父に成り代わりその関係を維持したいと願われた。そして公爵の話を契機に，しばしの間ふたりで一緒に教育を受けたことを思い出した。このようにご挨拶を交わしたあと，公爵閣下からパリに来る気はないかと尋ねられた。残念ながら，低地帯に先約がありまして叶いませんが，どこにいようと閣下の忠実な僕ですと申し開きをした。

サヴォイア大公と交わしたラングドックでの任務は，このようにして終わった。リヨンからジュネーヴに向かった。ここでもまた，名声の方が先に届いていた。というのも，翌朝政府要人の名代として使者が現れ，私の到着を言祝ぎ，酒を持参しただけではなく，（しばらく滞在の予定であれば）当地で築城をご覧いただきご意見を伺いたい，と軍師の待遇を受けたからだ。視察してみると，鉄壁の守りと思われている処が最大の弱点であった。そこは山岳地帯で，築城に最も力を入れていた。だが，戦争の常として，技巧を凝らして造ったものは，やはり技術で破壊される。ほかの処よりむしろその箇所から，敵の侵入を怖れる必要があると思った。ほかの偉大な参謀も同じ指摘をなされています。城塞のアキレス腱として，総力を挙げて護るよう命令を出しますという。

（長旅で少し健康を害したので）しばらくここで休養し，薬を服用した。二週間後，バーゼルに向かった。川で舟に乗り，ようやくシュトラスブルク［ストラスブール］を経て，ハイデルベルクに入った。［プファルツ］選帝侯とその侯妃［エリザベス］に再び温かく迎えられた。暇を見つけて立派な図書館や庭園それに当地の珍品を眺めた。サンディランズ［スコットランドの老騎士］に預けた馬が精力旺盛だった。でもその馬を，歓迎のお礼に選帝侯の家来に与えた。サー・ジョージ・カルヴァート［後の国務大臣］と私は，ここを発ち，道中の大半は舟で低地帯へ向かった。到着すると彼に別れを告げて，一路オレンジ公［オラニエ公マウリッツ］のもとに馳せ参じた。他の者とは違って，見た目にも解るほど両手を拡げて歓迎してくれた。

たまたまこの夏，低地帯軍は野戦から遠ざかっていて，オレンジ公は午餐のあと，私とチェスをして時を過ごすことがあった。また，レイスウェイク［南ホラント州］まで出かけ軍馬を観たり，綺麗どころに言い寄ったりして時を過ごすこともあった。口説くときも私を同伴させたが，親しき仲にも垣根を設け，礼儀を欠くことはなかった。オレンジ公と離れているときは，特に許しを得てサヴォイア大公のため騎兵を募

ろうと全力を尽くした。当時，低地帯で将校であった実弟ウィリアム［既出；ハーバート家の三男］のため，その趣旨で委託を取り付けていた。騎兵隊の準備が整い，駐英大使を務めていたスカルナフィッシ伯爵に，お金を送れば弟は出陣可能と知らせた。

スカルナフィッシ伯爵から返事が来た。英国で資金が調達できそうで，手元に届き次第，馬百頭分に相当する額を送るつもりだと。しかし，ほどなく［一六一五年七月，サヴォイアと］スペインとの和平条約がアスティ［イタリア，ピエモンテ州］で締結され，馬の維持費すべてが私の負担となり，今日に至るまで何の補償もない。

［一六一五年の終わり頃］冬が近づいたが，今年はこれ以上何もすることがなかった。英国まで船で戻ろうとブリーレに赴いた[48]。当地で総督を務めていたサー・エドワード・コンウェイ（後の国務大臣［コンウェイ卿］）が，風の便りに私の滞在を小耳に挟み，訪ねて来られた。風を待つ間，毎日自宅に招待して下さった。ついに順風となり船に乗ると，コンウェイ閣下が船出の平穏を願い大砲を六発撃たせた。一リーグ［三マイル］進むか進まない内に逆風となり，岸に舞い戻った。ぶざまにブリーレに戻ると，コンウェイ閣下が前と同じく歓迎してくれた。三, 四日後，追い風が吹き始め，コンウェイ閣下が再び船まで案内され，祝砲を立て続けに六発撃たせた。英国まで半分の航路に差し掛かったと思った刹那，極めて酷い嵐に襲われた。帆は破れ帆柱を失い，かなりの時化（しけ）でしかも逆風が吹き荒れた。皆の者，難破だ，と航海長が諦めたほどだった。九死に一生を得て命からがらブリーレに舞い戻ると，コンウェイ閣下が海難を逃れたことを言祝（ことほ）いでくれた。あの暴風雨からすると，海の藻屑となるは必定と観念したという。

以前と同様に厚遇を賜り，しばらくここに滞在した。待てば海路の日和あり，風も好転しコンウェイ閣下より再び船に案内され，祝砲を雨あられと受けた。港から出た途端，向かい風となり押し戻された。このためこの地では，もはや運を天に委ねられないと判断し，小舟を雇い水門まで行き，オステンド［オーステンデ；現ベルギー内，北海に面する港町］に向かった。そこで道連れを得て，ブリュッセルに赴いた。投宿した旅籠は酒場を営んでおり，スペイン軍の貴顕や幹部将校が集っていた。翌日，午餐をとろうと席に着くと，彼らは私の名を知らず，私も自分で名乗らなかったせいか，イタリア語やスペイン語そしてフランス語で様々な問題について論じ始めた。最後にその内の三人が，次々とイギリス国王であらせられるジェイムズ陛下を扱（こ）き下ろした。もし私が下賤の輩であれば，咎めだてる必要もないと心中ひそかに思った。というのも，だれひとり私のことをイギリス人だとはつゆ知らず，自分たちの話す言葉が十分に理解されるとも思わなかったのであろうから。でも，その思いとは裏腹に憤怒の火炎がむらむらと燃え上がるのを感じた。帽子を脱いで立ち上がり，陛下を毀損する言葉を口にしなかった上座に坐る御仁たちに向かって，イタリア語で叫ん

だ。吾輩はイギリス人だ，我が国の陛下を貶める侮辱は聞き捨てならん。頬かむりするなら，死んだ方がましだと。そして陛下の名誉を傷つけた連中に向き直り，貴様ら，嘘偽りを述べたので決闘だ，と捲し立てた。上座の御仁たちが私の言い分に理があると認め，私が異を唱えた事柄に対し厳しく奴ばらを叱責した。つまり，陛下に赦しを請わせたあと，全員で陛下の健康を祝し乾杯した。ブリュッセルからダンケルクへ，そしてグラヴリーヌ［北海沿い；沖合でアルマダ艦隊と海戦］へと渡った。そこで面識はないが，あるイギリス人女性が尼僧院の門を潜る姿を目撃した。次にカレーに着いた。天気が極めて悪く，危険を冒して出帆してくれる船頭が見当たらなかった。とはいえ，我慢も限界に達しており，とある貧しい漁師に舟を出してくれないかと持ちかけた。この釣り舟は港でも最低のおんぼろ。覆いもなければ甲板もない。しかも年代物ときている。でも，旦那と同じで，生命（いのち）なんざあ，これっぽっちも惜しかぁ，ありませんぜ。渡りたきゃ，ようがす，お連れ致しあしょう，と応諾した。

港を出た途端，うねる高波に飲み込まれるかと思った。海水が舟にどんどん入り，一生懸命汲み出した。それでも刻一刻と沈没の時が近づく気配だった。沖へ六リーグ［十八マイル］進む前に，神の思し召しで嵐が収まり，ダウンズ［ドーヴァー海峡沖の停泊地］まで海路が拓けた。そこに着くと，これまで蒙った謂われのない危険からお救い下さった神に感謝し，ロンドンに向かった。上京して十日と経たないうちに，四日毎に起こる瘧（おこり）［温帯性マラリア］に襲われた。一年半は間断なく続き，その後一年半は春と秋に見舞われた。病気の間は，学問に打ち込めて素晴らしい日々であった。これまで如何なる人も経験したことのないと思われるほど長期にわたる激烈な発作で，病も次第に力を失った。お蔭で痩せて肌も黄色くなり，だれも私だと判らないほどだった。この養生中に，たまたまある事件が起きた。ある日，ホワイトホールまで外出した折，エマソンという人物に会った。奴が竹馬の友サー・ロバート・ハーレー［既出；三番目の妻はコンウェイ卿の娘ブリリアナ］のことを悪し様に罵るので，病弱といえども友に向けられた中傷を聞き捨てならず，長く伸ばした奴の顎髭を掴んでこづき回した。街中だったが，一歩下がって剣を抜いた。こちら側には，友のひとり大尉トマス・スクリヴンがいた。あちら側には，何人も味方がいた。見たところ私は病気で消耗しており，周囲の者は私が打々発止の斬り合いができるのかと訝ったが，それでも私は斬りつけるぞという気概だけは人一倍溢れていた。しかしながら，悪たれエマソンは剣を抜かずにサフォーク・ハウスの屋敷に逃げ込み，後になって枢密院にこの出来事を讒訴（ざんそ）した。エマソンはほどなく遣いの者を寄こした。健康がすぐれない中，敢えて決闘を申し込むほど友のハーレーを讒言（ざんげん）したわけではなかったらしい。枕も上がらず床払いが済む前のこと，サー・ジョージ・ヴィリアーズ，後のバッキンガム公爵が国王の寵愛を受けるようになった。この人物と偶然レディ・スタンホープ［スタナップ］の屋敷で鉢合わせした(49)。私のもとに近づいて来て言うには，貴

殿の武勇伝をあれこれと聞いております。国王陛下から信頼を得ていますので，貴殿のためにご尽力できれば幸いですと。心から感謝して答えた。当面は病の治癒を優先したいと思っております。大望を抱くことがありましたら，厚かましいようですが，お口添えのほど，どうかよろしくお願いしますと。

この宿痾から本復してほどなく，オクスフォード伯［前出；ヘンリー・ド・ヴィア；妻は美貌のダイアナ・セシル］と私はヴェネツィアの［対ハプスブルク家］戦争に加担するため，二箇聯隊を召集することに決めた。遠征の準備をしているとき，フランスに大使を派遣することになり，国王陛下がサー・ジョージ・ヴィリアーズに適材を推挙するように指示された。十八人の名前（その中に私も含まれていた）が記された名簿が提出された。陛下は即座に私を選ばれたが，枢密院の認可を望まれ，陛下の人選が承認された。旧造幣所からほど遠からぬ庭園内の屋敷に使者が来て，即座に出頭するように要請された[50]。賦与される栄誉のことなどつゆ知らず，枢密院が突然使者を遣わすとは，何かしでかしたかと訝った。これから午餐に与(あずか)るので，そのあと参内致します，と使者に言伝を託した。午餐を終えるとすぐ，もうひとり使者が遣わされ，今度は即刻ホワイトホールに出頭せよとの命令であった。行ってみると，枢密院のお偉方からフランス大使閣下の称号でご挨拶を賜った。それで，立派な肩書きを嬉しく思います。ただ，唐突に枢密院より呼び出しを受けましたので，濡れ衣でしょうが私に訴えが出ているのかと内心ひやひやでしたと。

最初の任務は，両国間で交わされた盟約を更新することであった。その趣旨では特命大使であったが，それが終わると，大使として駐在することになっていた。支度金として，約六, 七百ポンドを受け取り，屋敷の金庫に納めた。夜の帳が降り，深夜一時頃，数名の話し声と戸を敲く音がした。屋敷の母屋には，私と妻，それに妻の小間使いだけしか眠っておらず，召使いは離れに詰めていた。物音を聞いた途端，強盗だとピンと来た。しかしながら，寝床から出て窓に行き，どのような人物が寝込みを襲いに来たのか確認した。最初に聞いた言葉は，ウェールズ人よ，降りてくる肝魂(きもったま)はあるのかであった。その挑発に乗り，すぐさま右手に剣を左手に小さな盾を持ち，下着のまま階段を滑り降り，扉を勢いよく開けて怒り狂ったように十から十二名に襲いかかった。ある者は斧槍(ハルバード)を捨て一目散に潰走し，またある者は狭い通路を我先に逃げようとしたためか同士討ちとなった。蜘蛛の子を散らす退却に乗じて，奴らを旧造幣所通りの半ばまで追いかけたが，跣足(はだし)で石畳を走り疼きはじめ，夜盗を逃げるに委せるのが好ましいと判断して帰路に就いた。召使いたちも騒動を聞きつけ，この頃までには準備を整え，逃げた悪漢どもを追いかけましょうかと訊いた。もう手の届かない所まで逃げたであろうから，一緒に戻ろうと答えた。

旅の準備を進めている頃，ある日たまたまイナー・テンプル法学院を通り抜けようとしたとき，同郷［で因縁の間柄］のサー・ロバート・ヴォーンに遭遇した。互いに

口汚く罵り合った。それが契機となり，また名も知らぬ誰かの入れ智慧もあり，私に果たし状を送ってきた。大尉チャールズ・プライスによって，ブラックフライアーズの我が家に，日曜日の午後一時頃にもたらされた。読み終えてから，プライスに言った。普段日曜は祈りを捧げるのだが，すぐにヴォーンと会って，剣の長さを較べてやろう。介添人はだれがやるのかと尋ねると，プライスは己が務めると。その場に居合わせた実弟サー・ヘンリー・ハーバート［既出六男；後の宮廷饗宴局長］に事情を伝えると，介添人を買って出た。あとは場所を決めるだけとなり，それもチェルシー近くの河原と決まった(51)。

すぐさま弟と一緒に舟に乗り目的地に着いたが，二時間しても相手は現れなかった。弟をヴォーンの宿まで使い走りに出し，長らく人を待たせるのもいい加減にして一刻も早く来い，と催促させた。しばらくして弟は戻ってきたが，相手はまだ準備が出来ていないという。さらに一時間半，首を長くして構えていたが，やはり待ち人来たらずで，再び弟を遣わすことにした。風邪をひいたが，日没までは待ってやる，と伝えさせた。弟は奴を連れて来ず，手ぶらで戻ってきた。ふたりで日没後半時は待って，帰路に就いた。

翌日，ウスター伯爵［第四代；エドワード・サマセット］より陛下の名代として，今後ヴォーンから一切連絡を受けてはならぬと命じられた。それとともに，陛下から，両名の因縁に終止符を打つよう命を受けたという。その趣旨で，翌日二時頃に会いに来るようにと言われた。翌日その時間に伺うと，ウスター伯爵より直直に諌められた。大使となり公人となったのだから，私的な怨恨を抱いてはならない。そのあと，伯爵は何の造作もなくヴォーンとのもめごとに方（かた）を付けた。フランスの任務という大役を陛下より仰せ付かる私が，この一件で免職になるのではと考える人もいた。だが，サー・ジョージ・ヴィリアーズ（後のバッキンガム公爵）が，今回に限る，という条件付きで後ろ盾になってくれた。

もうすでに旅の支度も済み，先任者に随伴した経験者から，選りすぐりの随員も決まったとき，個人的に付き合いのある友人から助言を得た。国庫からの支給は，あまり当てにならず，現金を調達できるように信用状を持参した方がよいと。前任の大使に融通した人物を調べると，フランス人のサヴァージュ［ソヴァージュ］殿であった。その仏人の家に出向き，前の大使と同様，フランスでの資金繰りを助けてくれないかと持ちかけた。あなた様のことはよく存じ上げませんので，ご照会しておきます。こういう次第でその両替商のもとを去り，当代信用随一の［フィリップ・］ブルラマッキ殿を訪ね，同様の交渉をした。あなた様は立派な騎士で，約定を違えず信用のおける方と，かねてより評判は伺っております。そう言って書斎に行き，パリのド・ランゲラク殿宛に英貨で二千ポンドの信用状を出してくれた。どのような担保が必要かと尋ねると，口約束があれば，他に何もいりませぬと，鷹揚な返答。とても大

きな借りが出来たが，精一杯努めて返済する所存と決意を述べた。

金庫に多額の資金と，この信用状とを手に入れ旅立った。ロンドンを発った日は，今でもよく憶えているが，アン王妃が埋葬された日［一六一九年五月十三日］であった。王妃殿下をお慕い申し上げるすべての者にとり，誠にもの悲しい葬送であった。旅の最初の夜は，グレイヴゼンド［ケント州］で過ごした。宿で夕食をとっているとき，前述のサヴァージュ殿の訪問を受けた。先ごろ信用状のお話を承り，あなた様にお喜び頂けるものをご用意致しました。だれ宛かと尋ねると，パリのタルマン殿とラムブリエ殿宛であるという。ふたりはどれぐらいの価値の者かと訊くと，英貨で約一万ポンドという。この信用状はどれくらいの価値かと問うと，ご入り用の分に応じてという。担保はいかほどかと尋ねると，何も，言質だけで十分。聞くところによりますと，あなた様のお約束は必ず守られるとのとこですから。

グレイヴゼンドより道すがら苦もなくドーヴァーに到着，百有余人の一行と船に乗った。すぐさまカレーに着いたが，その港町では，供された料理の味は故国の二倍の美味さでありながら，しかも支払いは半分であったと記憶している。カレーからブローニュ［・シュール・メール］，モンストルヴィル，アブヴィルそしてアミアンを経て，二日後パリ近郊のサン＝ドニ［歴代の仏王が眠る大聖堂で有名］に到着した。するとそこでは，私を出迎えるべく，馬車が長蛇の列をなしていた。その中には，式部官や旧友のメノン［ムヌー］殿，それに恩師ディザンクール殿がいた。そのメノン殿は今では馬術学校を経営していて，騎馬隊を率いパリまで付き従ってくれた。

パリに到着したのは，土曜日の夜，それも遅い時間帯であった。宿にようやく落ち着けたと思ったら，スペインの仏大使に仕える秘書官を通じて，要請があった。いの一番に私から表敬訪問を受けたい，つまり翌朝謁見しに来てもらいと。あいにく終日祈りを捧げる日でして，しかるべき時までお待ち下さるようにと伝えた。閣下も同じく日曜を主日とお考えです。でも，ご貴殿に対する閣下の評価は高く，すべての案件を差し置いてもご貴殿を厚遇する気持ちを優先させたいと申しております。しかしながら，月曜まで待たせた。

ほどなくフォブール・サン・ジェルマンはトゥルノン通りに家を借りた。家賃は年二百ポンド（英貨）。家具調度品を備え付け，随行者全員に仮住まいを見つけてから，フランスの宮廷が置かれていたトゥールとトゥレーヌへ向けて旅立った。当地に着くと，酷暑であった。フランス国王［ルイ十三世］と王妃にお目通りを願い出て，叶えられた。イギリス国王［ジェイムズ一世］が仏王に注ぐ多大な愛情を訴え，両国間に昔より続く同盟関係だけではなくて，［先王］アンリ四世とイギリス国王との間で交わされた，どちらか一方の君主が先に亡くなった場合，遺された方がその子孫を監督するという堅い約束をも再確認して頂いた。さらに，私の役目は君命による義務というより，むしろ両国のため自ら進んで行なうものであること，したがってフラン

ス国王陛下に礼を欠く振る舞いがあれば，それは私の落ち度となることを誓約した。このあと，我が国王陛下による信任状を手渡した。仏王もイギリス国王との相互の友誼を再確認し，殊更に私を宮廷に歓迎する意向を示してくれた。フランスの国王陛下は口数が少なく，それも極度の吃りで，一言半句を発する前にしばし黙止することが何度かあった。その上，歯並びは二列[52]。常習となっている狩りや鷹狩りの際，ほとんど倦むことを知らぬほど一心不乱となり，奇声や歓声を挙げることはめったに，いや，まったくない。ブツが身体からはみ出している，ありていに言えば，つまりヘルニアのことであるが，それでも狩りを止めることはない[53]。狩りを行なうとき馬に乗らぬことしばしばで，廷臣だけではなく馬丁をも疲弊させることで知られる。それは，どうやら寒暖に無感覚であることに起因するらしい。国王陛下の知性や天賦の才は，教育を受けずに育てられた者に予見される程度で，いともたやすく幼君を御することができるようにと周囲の者から長期にわたり無学にされた。そうはいっても，実行力のある多くの賢者と親しく交わり，時の経過とともに様々な事柄に知識をたくさん得るようになった。陛下はまた，無教育の内に養育された者すべてにありがちなふたつの特質，猜疑心と本心を隠す猫かぶりで有名である。というのも，無知な者は暗闇を歩くとき，躓(つまづ)く恐怖にかられる。また同様に無知な者は一般的に，賢明で手堅く明示的な仕方で公私にわたる行動を律する原理原則を持ち合わせておらず，寝業(ねわざ)を用い己が至らぬ点を補おうとする。だがそれは，時に貧窮者には言い訳となり，また瑣末な問題を扱う者には実際よく見受けられる特質であるが，一国の王にあっては非難すべき瑕疵(かし)である。なぜかというと，君主たる王は理性の力に基づき判断すべきであって，頼りない補佐に身を委ねるべきではないからだ[54]。とはいえ，勇猛果敢を誇示する場合が生じたとき，陛下は恐怖のため足が竦(すく)むことはなかったし，猫かぶりゆえに新教・旧教いずれの臣下に対しても個人的に禍をもたらすことはなかった。寵臣はリュイヌ公［シャルル・ダルベール］で，陛下が未成年のとき，庭で鷹を放ち小鳥を襲わせたり，小鳥に蝶々を捕らえさせたりして，巧みに取り入った。鷹匠としてだけ信頼していれば，それも許されるのだが。成年に達してからも，政治(まつりごと)の采配を鷹匠の判断に委ねたものだから，数多くの過ちが生じた。

フランスの母后［マリー・ド・メディシス］や諸侯それに貴族は，鷹匠の助言が陛下に与える影響の大きさを憂いていたが，ついには内乱を招くことになった[55]。鷹匠に寄せられた信頼が如何に陛下を裏切るものであったかは，以下の逸話によって立証されよう。つまり，ボヘミアに関する案件が持ち上がったとき，鷹匠は内陸の国か，それとも海に面した国かと尋ねたという。しかも，陛下や居並ぶ廷臣たちの面前で訊いたのだ[56]。

国王陛下に謁見する栄に浴し，スペイン王［フェリペ四世］の姉君であらせられる王妃殿下［アンヌ・ドートリッシュ］に拝謁した。話すべきことはほとんど何もな

く，イギリス王の名代として社交上のご挨拶を申し上げた。けれど，王妃の女性としての特質に値する程度のお愛想は申し述べた。王妃は，オーストリア［ハプスブルク］家のお姫様で，とても美しいだけではなく，気立てもよく親切である。王に陳情に来る民衆があれば，如何なる者にも執り成しを拒まず，民草の訴えが実を結び得心するまで，全力を尽くしたことで知られる。結婚して何年も経ち，子を宿す年齢に達していながら，しかも王妃には，見たところこれといって身体に不備があるようには思えないが，未だ子宝に恵まれることはない[57]。かなり仔細に憶えているが，王妃は公の場で不肖私奴（わたくしめ）にご贔屓になさって下さった。それも，私の召使いだけではなく，様々な人々がそれと気付くほどに。最初のお目通りのあと，リュイヌ公に会いに行った。次に謁見したのは，国の主だった大臣や諸侯，それにその令夫人方や宮中に参内している貴婦人の方々，さらには以前スカーフを英国王妃に献上するように託された，あのコンティ親王妃である。フランス国王と閣僚との折衝に関して，この場で公言できるのはこれが精一杯である。私の目的は，さらに寿命が与えられるのであれば，ロンドンにある自宅の長櫃（ながびつ）に急書の写しをすべて入れて保存してあり，別の機会に公表することである。思えば，在任中のフランスで，かの国では何度か内乱が起こった。英国皇太子（後のイギリス国王チャールズ一世）がバッキンガム卿などを伴いパリを経由してスペインに渡った。プファルツ選帝侯をめぐるボヘミアでの騒乱，プラハの戦い[58]，それに本国と対外戦争に関わる様々に由々しき事態が在任中に起こったものだ。精確な情報を得られない人々にとっては，私の話が一読に値するものと思われる。したがって，ここで記憶に残っているものだけを話そう。短い断章でも伝記の一端を伝えられるというもの。

トゥールからパリに戻ると，ある方針に沿って出来るだけ支出を抑えようと，家屋と厩舎の維持費を切り詰め，家計のやりくりに注文を付けた。ただ，フランスの流儀に従い，食事の度に，大量の牛肉や子牛の肉，羊肉と豚肉，そして七面鳥や鶏や雉や鷓鴣（しゃこ）などあらゆる鳥肉を供し，フランス風にパイやタルトも忘れず，それらが終わると，幾皿もの砂糖菓子を出すのを認めた。妻のメアリーがフランスに渡るのを固辞したため，これらのことに指示を出すのは，私にはかなり負担だった。当時家内は水腫症を患い，何年間も子を身籠もることがなかった。やむを得ず執事を雇った。その執事は物分かりがよく勤勉であったが，正直者とは言い難い。一等書記官はウィリアム・ボズウェルで，現在低地帯で外交官を務めている。フランス語担当の書記はオジエル殿で，後にフランスで外交官を務めた。馬の管理はド・メニ殿［既出のムヌー］に委せた。メニ殿は後にドイツとの戦争で千騎の騎兵を指揮し，武勇を発揮した。クロフツ［クロフト］氏も高等書記官のひとりで，後に王の酌取りとなった。優れた知能の持ち主トマス・カルーも書記で，後に王の肉切り給仕となった。次官に据えたエドマンド・タベルナは後に宮内庁の書記長に，スミス氏はノーサンバランド伯爵の秘

書官になった。後に出世した人々の名を並べ立てたが，さらに多くを挙げることもできる。そうすることで，私に仕えてくれた方々について，以前申し述べたことが虚妄（こもう）ではなく真実であると裏書きされよう。

私がパリに来た当初は，イギリス人とフランス人の仲は，最悪で剣呑（けんのん）な雰囲気に包まれていた。バックリーとかいう人物の言葉を借りると，ポン・ヌフ橋では，ただイギリス人だという理由で，襲われ手痛い目に遭わされたという。けれど着任後一ヵ月もすると，全イギリス人が歓迎され，ほかの国民が疎まれるようになった。それも，フランスの遊び人連中が酔っぱらって，我が同胞に絡み喧嘩を売ったとき，名だたるフランス人が何人も我が同胞に加勢してくれたほどだ。

たまたまある日，遠縁のオリヴァー・ハーバートと随員のジョージ・ラドニー，それに召使いの頭ヘンリー・ウィティンガムが取るに足らぬ事でフランス人と喧嘩をした。親戚のオリヴァーは，偶然にコンデ公［二代目アンリ・ド・ブルボン］お抱えの用心棒を敵に回し，何箇所にもわたってかなりの刀傷を与えた。コンデ公の館がほど遠からぬ所にあり，剣の指南役はその宿営で人気者であり，フランス人が大挙して助太刀に来た。前述の三名を役邸まで駆り立て，門の内側まで押し寄せ，鎌首をもたげた。窓からこの光景が見え，剣を持って出迎えた。連中は私の姿を見るとすぐ，算を乱して逃げた。しかしながら，手練（てだ）れの剣客は半死半生の体（てい），おかげでオリヴァーはフランスから追放された。オリヴァーの罪が軽減されるようにと，傷の治療代および慰謝料として当の剣客に仏貨で二百クラウン，つまり英貨で六十ポンド支払った。

近頃パリではペストが猖獗を極め，モンモランシー公［二代目アンリ］にメルルー城を借りたいと申し出た。その城に，公爵のご尊父様がご存命のとき暮らしたことがある。公爵は喜んで認めてくれた。パリを発ち，田園の心地よい風情を満喫した。旧知の者も大勢歓迎してくれた。

メルルー城の隣には新教徒のド・モンタテーレ男爵が，もう一方の隣にはド・ブットヴィル殿がいた。ブットヴィル殿は当時ほんの従者風情だったが，後にフランス人全員がこぞって称賛する豪胆の騎士となった。両隣の城には，何れが菖蒲（あやめ）か杜若（かきつばた），美しくて分別のある淑女が大勢いたが，なかでもブットヴィル殿の妹は当代随一の美女と称えられた。妹君の取り巻きが呑んで浮かれて底抜け騒ぎ，お蔭で公務に支障を来すことがあった。

《注》

(40)　外交官で詩人。一六〇四年七月十九日，ヘンリー・ウォットンが大使着任のためヴェネツィアに出帆するに際し，ジョン・ダンは，書簡詩「サー・ヘンリー・ウォットンに，大使としてヴェニスに赴任されるに当たって」を贈った。John Donne, *The Complete English Poems, op. cit.*, pp. 216-17／『ジョン・ダン 全詩集』前掲，三六五－六七頁。*Cf.*, Izaak Walton, *op. cit.*, pp. 113ff.

(41)　ダッドリー・カールトンは，ヘンリー・ウォットンの後任として，一六一〇年，ヴェネツィア駐在大使に着任。後に国務大臣に就任。

(42)　原語は，the English College. もとは，イギリスの巡礼者を受け入れるローマの宿坊であったが，ヘンリー八世がローマ教皇と袂を分かち，一五七九年頃にはイングランドとウェールズでの宣教を目的としたカトリックの司祭養成所となる。

(43)　サヴォイア公カルロ・エマヌエーレ一世は，領土継承問題からスペインに怨恨を抱きプロテスタントになる。対スペイン戦争に備え，スカルナフィッシ伯爵をイギリスはジェイムズ一世の宮廷に派遣し，援助を申し出る。ロンドン塔に投獄中のウォルター・ローリーがジェノヴァに牽制攻撃を仕掛ける算段だったが頓挫する。

(44)　アルベルトゥス・モートンは，ヘンリー・ウォットンの甥。このあと，ハイデルベルクはプファルツ選帝侯妃エリザベスの秘書官となる。

(45)　サー・ジェイムズ・サンディランズ。プファルツ選帝侯妃エリザベスの侍従長。異本（シャトルワース版）の読みだと，条件を付けたのが，ハーバート卿ではなく，申し出た本人となっている。「スコットランドのサンディランズ一族の老騎士がこの噂を聞きつけ，道すがら馬たちを大切に扱い，現地に着いてからも手厚く世話をするという条件で，ハイデルベルクまで私の持ち馬を拝借できぬかと願い出た。」

(46)　深紅色と訳した原語は，naccarine. *OED* は用例としてハーバート卿の自伝のみを出典として挙げる。一六〇四年ごろ，バースの騎士叙任を記念して描かせた肖像画（ポウィス）を参照。

(47)　リチャード・サックヴィルの弟。一六二四年，兄の爵位を襲爵し第四代ドーセット伯爵となった。ハーバート卿は，エドワード・サックヴィルの第一子が出生時に亡くなったことに対し，追悼詩を寄せる。Edward Herbert, *The Poems, English and Latin, op. cit.*, p. 30.

(48)　ブリーレと訳した地名の原語は，The Brill で，オランダの地名 Brielle or Den Briel の英語名。南ホラント州内に位置するが，当時イギリスが占有していた。オランダ独立戦争（八十年戦争）で五千名の援軍を差し向ける担保に，エリザベス一世が一五八五年に手に入れた都市のひとつ。一六一七年に返還。

(49)　後のチェスターフィールド伯，スタンホープ［スタナップ］卿フィリップの妻キャサリン。

(50)　旧造幣所と訳した原語は，the Old Exchange. 聖ポール大寺院の近くにあった。King's Exchange, or the Change とも呼ばれる。かつて複数あった鋳造施設ひとつ。王立取引所（the Royal Exchange）とは別物。*Cf.*, John Stow, *A Survey of London Written in the Year 1598,* ed. Henry Morley (1598; rpt. Stroud, Gloucestershire: Sutton, 1994), pp. 81-82; p. 342.

(51)　チェルシーは，ハーバート卿の母マグダレン・ハーバートがサー・ジョン・ダンヴァーズと

再婚後暮らした地である。その屋敷には，イタリア式庭園があり多くの文人や知識人が訪れたという。例えば，ジョン・ダンやフランシス・ベイコンなど。『英文学と結婚』前掲，一三六頁。

(52) 吃音だったのは事実らしい。ただ，過剰歯か，あるいは，上顎が小さく前歯が二列になっていたのかどうかは不明。先王で父親のアンリ四世と息子で後のルイ十四世は，言い伝えによると，乳母を悩ませる歯並びであったという。A. Lloyd Moote, *Louis XIII: The Just* (Berkeley and Los Angeles: U of California P, 1989), p. 21.

(53) ヘルニアと訳した原語は，herniosus で，脱腸のという形容詞。*OED* がこの箇所を用例として挙げている。

(54) 一説には，摂政となった母后マリー・ド・メディシスは，己が権力の保全のため幼い息子ルイを政治からも，また彼を利発にする賢者からも遠ざけたという。その結果，ルイ十三世は，母親に面従腹背したものの，内面では不満が沸沸と煮えたぎり「口を堅く閉ざし，能面のような顔で本音を隠した…」。A. Lloyd Moote, *op. cit.*, pp. 58-59; p. 80.

(55) 一六一七年，リュイヌはルイ十三世の差し金で，政敵であった母后の寵臣コンチーノ・コンチーニ（フィレンチェから連れてきた策士）を暗殺し，母后をブロワ城に幽閉する。一六一九年，母后の支持者・親派がマリー・ド・メディシスを解放して，内乱が勃発。

(56) シェイクスピアの『冬物語』（三幕三場）でも，ボヘミアは海に接する国として描かれている。*Shakespeare: Complete Works,* ed. W.J. Craig (London: Oxford UP, 1965), p. 337.

(57) スペイン王フェリペ三世（一六二一年歿）の長女アンヌ・ドートリッシュは，一六〇一年生まれ。ルイ十三世と結婚したのは，一六一五年。流産を三度も繰り返し，一六三八年，結婚して二十三年目，三十七歳にして第一子，後の太陽王ルイ十四世を出産する。

(58) 特に，プラハ郊外での白山の戦い。一六二〇年十一月八日，ボヘミアのプロテスタント連盟軍の敗北が決定的となり，ボヘミア王であったプファルツ選帝侯フリードリヒとその侯妃エリザベート（英国王ジェイムズ一世の娘）が零落，ボヘミアから逃亡する転機となる。C.V. Wedgewood, *The Thirty Years War, op. cit.*, pp. 117-30. ／C・ヴェロニカ・ウェッジウッド『ドイツ三十年戦争』前掲，一二五－三九頁参照。